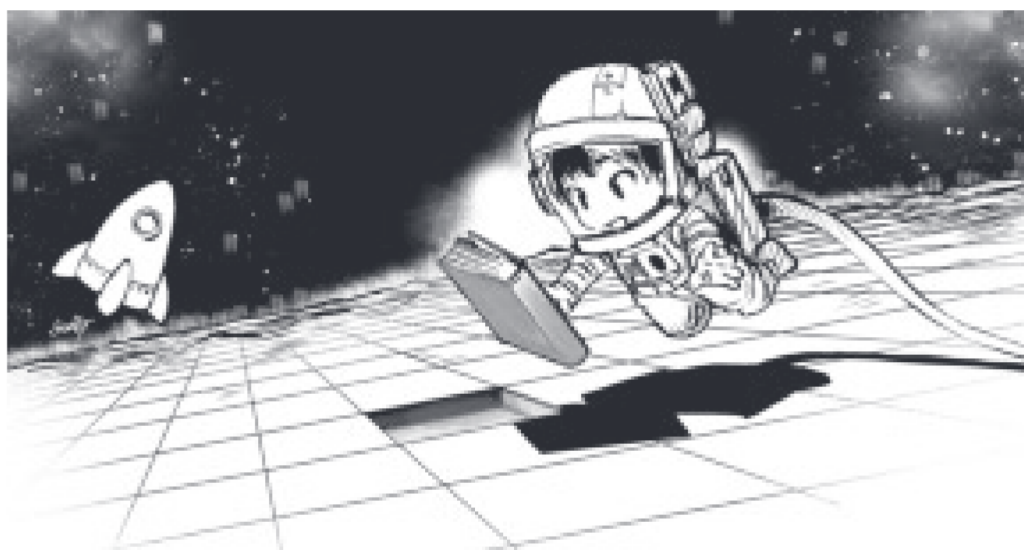

第 1 章

本を読む

本を読むことで、私たちは先人が何を考えたかを理解し、どこまで知っていたのかを確認することができます。そして同時に、何が足りず、どこを目指せばいいのかを予想することも可能になります。

本を読むということ。何気ないようでいて、実はきわめて大切な技術です。本章では、大学生として本とどう向き合うかという心構えと方法を学びます。



(a) 大学生にとっての書籍

「読むべき本」は自分で探す！

高校生にとっての書籍は、まず学校の授業専用に使われた「教科書」が中心でした。学習するすべての教科書を学年のはじめにそろえ、副読本や参考書も基本的には教科書の内容に基づいていたことでしょう。

しかし大学では、教科書があっても講義専用のものとはかぎりません。一般の書店でも販売されている書籍が教科書に指定されることも、講義で説明しない内容を含む書籍が参考書として指示されることもあります。しかもそれらは講義の途中で次々と増えていきます。

また、高校では教科書や参考書を進度に合わせて指示通り読み、書かれている内容を理解し覚えながら学習を進めてきました。しかし大学では教員の考えによって指示がないこともあります*。自分で必要な書籍を探し、自発的に読んでいく必要があるのです。

*参考書となる文献のみを示すだけで、どこを読むかの指示がないこともあります。

授業における書籍の位置づけ

高校		大学
授業専用の教科書	書籍	入門書・専門書・一般書など
学習すべき内容をまとめたもの	内容	専門的な内容を説明・論証したもの
先生から指示がある	選択	学生が自分で探す
学習範囲へ到達するため	目的	問題をより深く考えるため

学術文献の選び方

大学では日常の講義のほか、レポートやプレゼンテーションの準備をする際に多くの文献を読むことになります。それらは「学術文献」*と呼ばれています。

テーマに合わせた必要な文献を自分で取捨選択しなければなりません。はじめて取り組むテーマでは、専門書の中でもまず入門書*を選びましょう。入門書で背景や基本的知識をだいたい把握したら、そこに記載されている文献情報をもとに、関連する文献を検索します。興味のあるテーマを見つけたら、それをキーワードに探すのもよいでしょう。新しい学術文献は基本的にそれ以前に出た同じテーマの文献を踏まえて書かれていることが多いですが、必ずしも最新の文献だけでよいとはかぎらないこともあります*。

効率的な情報入手を！

図書の場合は「目次」、論文などの場合は「見出し」を見ると、その文献の大まかな内容を早く把握することができます。また、多くの学術文献では最後に索引*や文献リスト*など、関連検索に役立てるための情報が提示されています。

*一冊の書籍として刊行されている「専門書」のほか、学会誌などの専門雑誌の中に「報告書」や「論文」といった形に収録されているものもあります。文献の種類については第4章も参照しましょう。

*書名に「〇〇入門」などの文言があるものにかぎらず、入門的な内容を扱うものをいいます。

*選択に迷ったら、教員に相談してみるのも一つの手です。その場合は自分の興味や問題意識がどこにあるのかを必ず伝えましょう。

*書籍中の重要語句などを順番に並べ、本文中に出現するページの位置をまとめたもので、インデックス (index) ともいいます。人名索引や事項索引のように種類ごとに設定されているものもあります。

*一般に、参考文献や引用文献、参考文献などと呼ばれています。

(b) 批判的に読む

「疑いながら読む」とは？

高校では教科書に書かれていることが正しいのは当たり前として学習してきました。しかし大学では、たとえ教科書とされているものであっても、その内容が本当に正しいのかどうか、疑いながら読むことが求められます。

学術文献は、あくまでもその研究領域を専門とする著者が自身の研究成果（あるいは経過）を示したものにすぎません。その著者の主張が正しいかどうかの判断は、読者の検証にゆだねられているのです。

そのため、学術文献を読むときには「批判的な読み方*」が必要になります。ただし「批判的に読む」といっても、むやみに粗さがしをして文句をつけることではありません。筆者の主張に疑問を抱き、その解決になる答えが示されているかを確かめるための作業なのです。

*クリティカル・リーディングともいいます。

批判的に読む＝筆者の主張を正しく理解する＋主張の妥当性を検証する

📁 読み方を使い分けよう！

文献の読み方には、おもに「速読」と「精読」があります。速読*とは、文献全体を大まかに読み、著者の主張が全体としてどのようなものかを把握するためにおこなうものです。一方、精読とは、著者が述べる文章の一つ一つの内容を確認し、論理を正確に読み取っていくためにおこなうものです。

大学での読書には、必要に応じて読み方を使い分けることが求められます。表中（１）～（３）は速読、（４）～（５）は精読による作業です。

*速読の方法には、「斜め読み（スキミング）」と「探し読み（スキニング）」が知られています。斜め読みは素早く全体に目を通し、要点だけをおさえながら先に読み進む方法です。探し読みは自分が求めている情報だけを全体から探し、その部分を述べる箇所を選んで読む方法です。

読み方の基本

（１）タイトルや目次を見て、文献の全体像を把握する
（２）「序論」「はじめに」などの部分を読み、文献の目的を理解する
（３）知らない語句は後回しにして全体に目を通し、構成のイメージをつかむ
（４）構成のひとまとまりごとに読み込んで「あらすじ」をつかむ 《(c) 項参照》
（５）正確に読めているかを確かめるために「要約」をおこなう 《(d) 項参照》

📁 訓練を積もう！

文献を批判的に読むためには、まず内容を正確にとらえることが大切です。そこで、文献を読む経験を積んでいくという地道な訓練が必要になります。特に「あらすじ」や「要約」など、ただ目で読むだけではなく、手を動かす作業の経験を重ねることが大きな効果を発揮します。

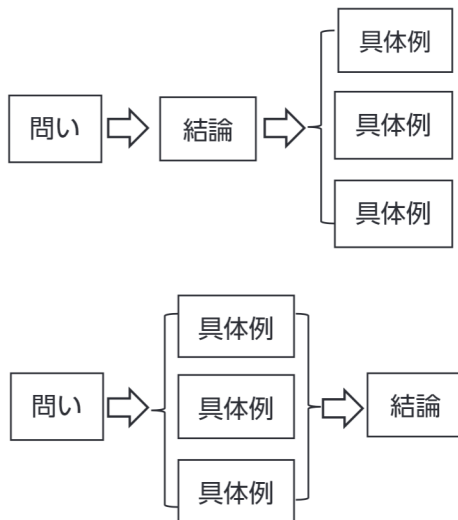
(c) あらすじをつかむ

📁 論述スタイルを見極めよう！

「あらすじ」とは、文章の大まかな流れのことです。文献を効率的に読むためには、内容面また形式面での流れをいかに早くつかむかがポイントです。

あらすじ（内容面）をつかむためには、論述のスタイルを知ることが有用です。文章を論ずるスタイルにはいくつかのパターンがあります。このうち、基本的なパターンとして、「頭括型」と「尾括型」*を知っておくと便利です。

*どこに「結論」を示すかという観点での分類です。



*論文やレポートについては、第4章および第5章を参照しましょう。

頭括型

- (1) 問題を提起する
- (2) 結論を示す
- (3) 具体例で検証する（根拠を示す）

尾括型

- (1) 問題を提起する
- (2) 具体例で展開する（根拠を示す）
- (3) 結論に導く

一般に、頭括型は説明的なもの（論説文など）に向き、尾括型は謎解きの色彩のあるもの（小説、書評など）に向くとされています。大学で求められる課題は、論文やレポート*など説明的なものが大半です。学術文献に向き合う際には、頭括型の流れを念頭におきましょう。

📁 構成には役割がある！

あらすじ（形式面）をつかむためには、学術文献の基本的な形式を知ることが重要です。学術文献の基本的な構成は、「序論 - 本論 - 結論」による三部構成です。専門書などの長い文献では各部分をさらに複数の段落に分けたり、また内容に応じて具体例を並列・比較・統合したりするなど、複雑な構成をもつ場合もあります*。

全体の大きな枠組みを見つけ出すことで、どこに著者の意見や根拠が示されているのか、重要な部分を把握できるようになります。

*例えば「結論の論証」には、方法・結果・解釈（分析）によるもの、また問題に対する複数の解決策を評価するものなど、さまざまな形式があります。

三部構成

序論	問題提起、話題の導入など
本論	意見の根拠、具体例、原因と結果、説明の展開、言い換え、追加など
結論	問題に対する著者の意見、全体のまとめなど

📁 読み込みの工夫

大まかな構成の把握ができれば、次はそれぞれの段落ごとに何が書かれているのか、中心となる文に注目しながら内容を読み込んでいきましょう。その際、各段落がどのような役割をしているかを考えながら読む*ようにすると、次項で示す「要約」の作業を効率よく進めることができます。

*必要に応じて速読と精読を組み合わせで読みましょう。精読が必要と判断できる箇所を把握しておく、と、要約しやすくなります。

(d) 要約文を作る

📁 要約：大事な部分だけを残す！

*「要約文」とは、ある人の文章が何を言っているのか、別の人に説明するために作成する文章のことです。何が大事で何が大事でないかを判断するだけでなく、それを的確にまとめる力も必要になります。

他人の書いた文章を理解できているかどうかは、内容を要約*することで確かめることができます。要約とは、大事な部分だけが残るように、文章全体から不要な部分を削っていく作業です。

要約の練習をすると、読解力と文章力の両方を同時に鍛えることができます。

要約文の作り方

(1) 文章の内容を端的に示す言葉（キーワード）を取り出す
(2) 内容の中心となる段落から、最も重要な一文（キーセンテンス）を取り出す
(3) キーセンテンスに優先順位をつけ、優先度の低い文を切り捨てる
(4) キーワードとキーセンテンスを整理しながら要約文にまとめる

📁 削る→整理する の繰り返し！

*キーセンテンス自体はもともと隣り合わせの関係ではありませんから、ただ並べても意味が通りません。

要約で注意すべきなのは、取り出したキーセンテンスを順番に並べ合わせるだけでは足りない*ということです。

要約文にまとめる作業*では、キーセンテンス同士をさらに削ったりつないだり、場合によっては入れ替えたりする必要が出てきます。

*キーワードを使いながら読みやすく整理し、新しい文として書き起こすこともあります。

要約する＝（文を）取り出す＋（文を）つなげる＋（文を）整理する

最後にどこを残すのか

要約文をまとめたら、自分以外の人が読んでも理解できる文章になっているかどうか確認する必要があります。必ず読み返して、誰がどうしたか、何がどうなったか、という、もとの文章全体の基本的な情報が取りこぼしなく残されているか確かめましょう。

また、著者の主張が書かれた段落*からキーセンテンスがきちんと生かされているかについての注意も必要です。主張部分が抜け落ちていると要約になりません。

要約文を読み終えたとき、もとの文章全体の流れをつかむことができるかが重要なポイントです*。実際、他の人に読んでもらって、確認・修正するとよいでしょう。

*頭括型で書かれた文章では、著者の主張は、序論（および結論）にて言及されています。

*もし話がどこかで途切れている、つながりが悪いといった印象が残った場合は、流れがきちんと押さえられていないことになります。

(e) 倫理・作法

書籍と向き合わない大学生活はありえません。大学生らしく書籍と上手に関わり合っていくためには、守るべきルールがあります。

📁 「借りた本」は丁寧に扱うべし！

気に入った本を読み込んでいくと、大事なところに線を引いたりマーカーペンで塗ったりと印をつけたくなるものです。しかし、本の取り扱いでは「その本が誰のものか」によって作法が全く異なることに注意が必要です。

書籍に限らず、他者から借りたものは、必ず借りたときと同じ、きれいな状態で返すのがルールです。折り目をつけたり汚したり、破ったりなどしてしまわないよう、細心の注意を払わなければなりません*。

*特に、借りた本への書き込みや付箋の貼り付けは厳禁です。

また、貸出期限は必ず守りましょう。特に個人から借りる場合は、最初に「いつまでに返す」という期限を明確に定め、その期日を守るのがマナーです。図書館では期限超過のペナルティが課されていますし、個人から借りた本の期限超過は信頼関係に影響します。

📁 「自分の本」はカスタマイズを！

自分にとって必要な本だと感じたものはぜひ購入して「自分の本」にしましょう。図書館や友人、先生など、他者から借りた本の場合はきれいな状態を保たなければなりませんが、自分の本の場合はむしろ逆の使い方にな

ります。

何度も読み、重要だと思ったら、付箋をつけたり書き込みをしたりして、積極的に活用しましょう。講義との関連をみつけたらノートとの照合箇所をメモするなど、ただ読むだけではなく、本の内容を自分の頭の中で立体的につなげていく工夫が効果的です。

表紙に手あかがつき、どのページにもメモ書きやマーカーの跡がびっしり残るほど読み込んだころには、本そのものだけではなく内容もしっかりと自分のものになっているはずです。読み込んだ本は、いつまでもあなただけの財産になるでしょう。

「著作者の権利」に配慮を！

著作物*には「著作権」があり、それを書いた人の権利が保護されています。したがって、書籍も他人の著作物ですから、借りたり買ったりした書籍をコピーする場合には、原則としてその著者の許可が必要です。

ただし学校教育や調査・研究などの目的の場合、書籍をコピーすることが特例として認められています。しかしその場合でも、書籍全体をコピーすることはできません。こういった条件があるのか、図書館の窓口などで確認しておくとい良いでしょう。

* 書籍など著作物を用いた情報収集については第4章も参照しましょう。

(f) 文献リスト

以下は、基礎的内容かつ入手が比較的容易という観点から選んだ関連文献（書籍のみ）です。図書館の所蔵書籍も含まれますので、ぜひ手に取ってみましょう。さらに文献情報が欲しい場合は、関連科目の担当教員に問い合わせましょう。

- 浅野高史・かながわレファレンス探検隊（2006）『図書館のプロが教える〈調べるコツ〉』 柏書房
- イアン・K・クロンビー（著）、津富宏（訳）（2007）『医療専門職のための研究論文の読み方：批判的吟味がわかるポケットガイド』 金剛出版
- 石黒圭（2010）『「読む」技術 速読・精読・味読の力をつける』 光文社
- 板坂元（1973）『考える技術・書く技術』 講談社
- 井上真琴（2004）『図書館に訊け！』 筑摩書房
- 大出敦（2015）『クリティカル・リーディング入門：人文系のための読書レッスン』 慶應義塾大学出版会
- 清水幾太郎（1972）『本はどう読むか』 講談社
- 高田高史（2007）『図書館が教えてくれた発想法』 柏書房
- 高田高史（2011）『図書館で調べる』 筑摩書房
- 対馬栄輝（2010）『医療系研究論文の読み方・まとめ方：論文のPECOから正しい統計的判断まで』 東京図書
- 西研・森下育彦（1997）『「考える」ための小論文』 筑摩書房
- 西林克彦（2005）『わかったつもり：読解力につかない本当の原因』 光文社
- 福澤一吉（2012）『文章を論理で読み解くためのクリティカル・リーディング』 NHK出版
- M・J・アドラー、C・V・ドーレン（著）、外山滋比古・槇未知子（訳）（1997）『本を読む本』 講談社
- 渡部昇一（1976）『知的生活の方法』 講談社